



先輩から後輩へ
 東京大学大学院薬学系 特任研究員
坂口 哲也
 (81回・平成20年3月卒)

私は2008年に藤枝東高校を卒業し、東京大学理科一類に入学しました。その後大学院に進学して博士号を取得し、現在もそのまま大学に残り神経科学の研究者として働いています。

さて、皆さんは「研究者」と言えばどのようなイメージをお持ちでしょうか。研究室にこもって実験ばかりしている姿をご想像された方もいらっしゃるでしょう。大体当たっています。でも、実はそれだけではないのです。普段から最新の科学論文を読み込んで知識をアップデートしたり、必要な解析手法を学んだり、国内外の学会に出掛けて他の研究者と情報交換をしたりと、常に「勉強」をすることが求められます。そして、そうした背景知識の中で温めた仮説を検証し新たな発見へと繋げていく、というのが研究の主な流れです。そんなわけで、研究者という職業は、勉強が好きの人にとっては天職とも言えるのです。ふふふっ。

では、そんな私ですが、大学受験も常楽しく乗り切ったかと言えば、正直なところ全くそんなことはありませんでした。それは、決められた枠の中だけで勉強することに疑問を感じていたからです(因みに大学で自分の好きな分野を好きに勉強するのは本当に楽しいので安心して下さい)。でも、これだけは高校生の皆さんに伝えたいのですが、大人になった今になって振り返ると、高校時代の勉強こそがその後の私の人生にとって一番大きな投資になっていたのは間違いないと思います。何のために勉強するのか、という問いには人によって様々な答えがあるかと思いますが、「人生における選択肢を増やすため」というのが私なりの答えです。だから、少し逆説的ですが、将来自分が本当に望み生き方で自由に生きたいと思う人ほど、高校生活を(ちょっと縛られた)勉強に捧げているのは本当によいことではないでしょうか。もちろん、大人になってから勉強を始めても遅くはありません。ただ、自分の将来のために100%の労力を費やせるのが高校生という身分の特権だということを知っておくと良いかもしれません。以上は私の経験に基づく考えです。すべての人に当てはまるとは思いませんが、何のために勉強したら良いのかよく分からないという方にとって少しでも参考になれば幸いです。



先輩から後輩へ
 平成29年度 前期生徒会長
福間 亮太

現在世界には何万もの職業があります。最近では小学生が将来なりたい職業ランキングの上位にユーチューバーがランクインするほど、昔とは異なる分野の職業に対する注目度も増してきていると感じています。そんな中、どの職業にも求められることは「学ぶ姿勢」だと思います。坂口さんの様に研究者として働かれています方だけでなく、コンビニエンスストアなどの私たちが身近に感じる場所で働かれています方でもあらゆる人が日々「学び」を続けています。

さて、何のために勉強するのか、という問いに対して坂口さんの言われた通り「人生における選択肢を増やすため」という答えを持つ人も多いと思いますが、私は勉強する理由は何かと聞かれて自信を持って答えることはできませんが、一つ言えることとしては勉強とは単に知識を身に付けることではなく、勉強することを通して人として生きていくうえで大切な「学ぶ姿勢」を身につけるためだと思います。例えば学校で学んだことを社会に出てから使うかと聞かれると、その分野を専門としている人を除いて多くの人がほとんど使わないと答えるのではないのでしょうか。では勉強とは単に大学受験で希望の大学に入るための1つのツールに過ぎないのか。そうではないでしょう。私は勉強をしていて新しい知識を身につけることがとても楽しいと感じています。このように毎日習慣的に行う勉強を通して新しいことを知る喜びにふれる事こそが、勉強以外の普通の生活の中で新しい発見を探そうとする第一歩となり、それこそが現代社会で求められる「学ぶ姿勢」ではないでしょうか。つまりどのような職業に就いたとしても必要とされる「学ぶ姿勢」は勉強という我々高校生が普段から一日の大半を費やし行っていることに帰着するのだと思います。

我々高校生はあと数年もしないうちに社会に出ます。それぞれが自分なりに考えた進路を進んでいくこととなりますが、高校生活の中で身につけた「学ぶ姿勢」は皆が失うべきではない大切な物です。坂口さんの言われた通り高校時代は将来のために勉強を十分に行うことのできる時期です。自分の中の「学ぶ姿勢」を確固たるものにするために勉強に本気になって取り組んでいきます。



グローバル化と大学
 立命館大学副学長
市川 正人
 (47回・昭和49年3月卒)

私は、立命館大学の法科大学院(弁護士などの法曹を養成するための大学院)の教授として憲法を担当してきましたが平成27年1月以来、立命館大学副学長を務めています。

立命館大学といつても、静岡県在住の皆さんには「関関同立」の一つといったイメージしかないでしょうが、立命館大学は、三つのメインキャンパス(京都市のほか、滋賀県草津市、大阪府茨木市)に14の学部を擁する、学生数で全国3番目の私立大学です。毎年50人程度が東高から現役で合格されており、うれしい限りです。

少子高齢化、グローバル化、情報化・AIの発達の中で、日本の大学は変革を迫られていますが、立命館大学が今、最も力を入れていることの二つは、グローバル化への対応です。立命館大学は、文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業(SGU)に採択されており、現在、年間約3300名が採択されている留学生、約1850名海外に送り出している学生を、平成35年度には1.5倍にしようとしています。

さらに、従来の国際交流や単位互換留学を超えた仕組みも構築しています。たとえば、来年度には、ワシントンDCにあるアメリカン大学とのジョイント・ディグリー・プログラム(JD)、「国際連携学科」を国際関係学部開設します。これは、学部レベルのJDとして日本初の試みですが、学生は、入学時から両大学の学籍を有し、日本のキャンパスで2年間ずつ学ぶことになります。さらに平成31年度には、世界大会ランキング20位まで、従来の国際交流や単位互換留学を超えた仕組みも構築しています。たとえば、来年度には、ワシントンDCにあるアメリカン大学とのジョイント・ディグリー・プログラム(JD)、「国際連携学科」を国際関係学部開設します。

位台のオーストラリア国立大学の共同修士課程でもある「グローバル教養学部」の開設を目指しています。

もちろん、こうしたグローバル化に対応し取り組みの推進は、高校での英語教育が変わってきていることが前提となります。40年以上も前の東高時代は「受験英語」まっさらで、私も、英文解釈や文法は大得意でしたが、リスニング、ましてやスピーキングはからしきだめでした。しかし、今では、高校までの英語教育において、読む、書く、聞く、話すの四技能の修得が重視されるようになってきました。今後こうした初等中等教育における英語教育の改革を政界でスーパーグローバル大学を目指した取り組みを進めていきたいと思います。



新しい価値を創ること
 株式会社CREA FARM (クレアファーム) 代表取締役社長
 司法書士法人つかさ 代表社員
西村やす子
 (60回・昭和62年3月卒)

最近、高校生や大学生に講演をさせていただく機会が増えました。私が在校生の頃は、企業経営者の話を聞くようになり、今は地域ぐるみで様々な学生時代に考えられるような教育プログラムが各地で展開されているようです。長年続いた社会の仕組みは崩壊しつつあります。人も経済も価値観も多様化された社会は、物凄くスピードで変化をしています。これから社会に出て行く若い人達は、変化に対応し生き抜く力が必要になってきます。

20代から司法書士事務所を経営していた私は、農業の新しいビジネスモデルを創るため、3年前に人生2度目の起業をしました。それまで法律職を通して、農地の耕作放棄問題や農家高齢化に伴う後継者不足問題など切迫している地域農業の課題を目の当たりにしていました。そして自分のスキルや経験を世の中の課題解決に結びつける仕事にいかし、地域を活性化させることに尽力しようと思えました。まずは農産物をブランド化し付加価値を付けて売れる六次産業化と大勢の人を呼び込み地域に賑わいを作る観光農園化を目指しました。

趣旨に賛同してくれた大勢の農業者と共にスタートした「オリーブの産地性」と地域農業の六次産業化による地域活性化事業は、地元経済界のサポートや多くの仲間との共感を得たことでスピードを持って進んでいます。今秋には、静岡日本平地区で初めての収穫と搾油が実現できそうです。また今年の春からは静岡県の内陸フロンティア総合特区「藤枝仮宿地区」において大規模農園事業に着手しました。

た。弊社と藤枝市、地元住民の皆様と日々協議しながら「食と農」に特化した新産業創設に向けて展開しています。

事業は決して順調ではなく、数多い失敗を繰り返して、そこから様々な事を学びながら手探りで進んでいます。失敗の原因は経営者である私の能力、経験不足に起因することが殆どですが、時々想定外の外的要因もあります。ベンチャー企業経営者として日々思うこと、自分に対する出来事は良い事も悪い事も全て必然であり、様々な課題に正面から向き合っていく一つ一つ解決していくことを繰り返しながら自分も組織も成長していくのだという事。課題をどう受け止めてどう考えるか、正しい生き方考え方が必要なのだと実感する毎日です。

混沌とした世の中には多くの課題があり、その課題を解決するために様々なビジネスが生まれています。人ひとりのチカラは小さくても、誰もが世の中を良い方向に変えるチャンスに溢れているとも言えます。これからは大勢の人々を巻き込み、持続可能な社会を創っていくためのムーブメントを仕掛けていきたいと思います。



随想
 前サッカー部OB会長
橋本 忠広
 (27回・昭和29年3月卒)

山梨、長野から優勝校1校だけ選出されたが、今年の国体には2校出場できることになった。3県のうち長野はレベルが低く弱いから、県下で優勝すれば必ず国体に行ける。部員はいよいよチャレンジャー、今年こそはなかなかなでも国体へと練習に励んだ。主将が長島清志、3年生に橋本忠広、井沢義久、鈴木保郎らが部員の時であった。

私は思い出した。

当時全国大会といえは国体しか無く、国体出場が我々の夢であった。春のスポーツ祭では浜松北に敗れてしまったが、近頃大会で前年国体優勝の葺橋高に1対2で敗れたものの、シュートが相手のハイポストに当たり8割方圧していた事で、我々は国体出場望み無きにも非ずの感を深めた。

机を片付け、教室に聲を敷き、大きな蚊帳を吊つての夏の合宿、屋の練習で疲れ、寝ようと思った所へ2、3人の先輩のシカルの差し入れ、嬉しくも思い出します。

県予選の初戦は磐田農高、次が静岡高。スポーツ祭で敗れた浜松北高に勝ち、準決勝は清水東高、決勝は静岡工高。全ての試合を必死の思いで戦い、何とか優勝を手に入れました。

プロリーグ予選は葺橋高、上松松高の3県のリーグ戦を本校のグラウンドで行い、我々は1勝1敗で念願の国体の出場権を得た。

本大会は四国の松山で行われ、1回戦は山口県の多々良学園に勝ち、2回戦で浦和高校に敗れました。優勝は広島の修道高でした。

試合の結果はともかく、国体出場を目標に、途に練習に励んだ当時を、今も思い出します。特に決勝の前の日の気持ち、高揚は大変なものでした。その一端を、高揚は大きな声で、その「端を」これまた松村先生の文章をお借りして締めとさせて頂きます。

「清水東高に勝つての帰りの道、静岡市内の県庁前あたりのお堀の側歩いていた。今年は国体へ出場するの機会である、明日の決勝には、静岡工高に勝つて国体へ行きたい、みな同じ思いがあった。歩いて語る話もただそれだけであった。用具の入った重いバックを提げ、話しながら歩いていくうちに橋本忠広が「明日の決勝は静岡工高に勝つて、国体へ出るならよかった」と力一杯道路に鞭を叩きつけるようにして投げつけた。」



人生「最高&最凶」の2016年
 新潮社勤務 演劇記者 筑波大学非常勤講師
近藤 主税
 (57回・昭和59年3月卒)

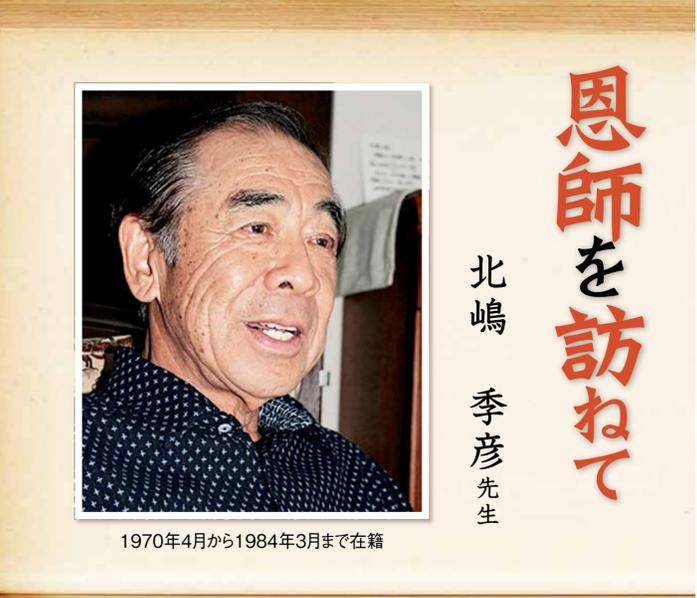
筑波大学の日本文学科で、歌舞伎を専攻、新潮社に入社して「週刊新潮」の記者をつとめつつ、専門誌を中心に演劇コラムを寄稿してきた。年にひとコマだが、筑波大学でジャーナリズム論を講義している。

二十代には、名誉棄損で告訴された東京地裁に2度赴いた。三十代には帝劇「レミゼラブル」の稽古場で、同級生の別所哲也さんと再会した。四十代は、長男十長女の保育園送迎に大わらわ。喜びも哀しみも幾歳月をかけた。五十路の2016年を迎えた。さて、この50年、二十年前の2016年5月「宝塚のレジェンド」と称された星組トップ柳希礼音が、歌舞団を退団した。若手時代に取材した「21世紀の天才」として小室を筆名した松原浩一が、執筆した縁があり、「柳希礼音論の決定版を執筆したい!」宮任え、時間はない。そこで「計を案じる。家事を超特急ですませ。夜9時就寝。午前3時目覚め、子どもたちを起す朝6時半までパソコンに向かった。1年後の2016年5月、「宝塚歌劇柳希礼音論」(東京堂出版)が刊行された。

3か月後「夏風邪かな?」38度の熱がつき、突然、太陽がまぶしくなる。妻がタクシーを呼び、東京、杉並区の河北総合病院に搬送してくれた。意識が混濁し、お花畑に包まれる。「劇症1型」という糖尿病で、わずか5日の間に、すい臓のランゲルハンス島β細胞が破壊され、インスリンが一滴も分泌されなくなった。原因不明。治療法なし。トホホ。

年間発症率は3000人。一日4回の血糖値測定(痛)、インスリン注射(痛)を、忽ち(痛)、三途の川にまっしぐら。平均寿命は、十年余も短い。失明・手足の壊疽。人工透析の三大併症とも隣りあわせだ。

1型患者の「希望の星」には、英国の女性首相トリサ・メイがいる。まずは小学校5年生の長女が成人式を迎えるまで、息災でいること。そして歌舞伎・宝塚、杉村春子について、満足ゆく論考を遣せたら。目下、次回作を準備中。静岡が生んだ初の男役トップ「明日海りお」(静岡雙葉中学卒)を構想中。が、至福の時である。続く「礼真琴論」(サッカー元日本代表・浅野哲也選手の次女。死んでも死にきれない。完成させないらちは、死んでも死にきれない。



恩師を訪ねて
 北嶋 季彦先生
 1970年4月から1984年3月まで在籍

あんずの里として有名な長野県塩田郡(現千曲市)で4人兄弟の末っ子として生まれ、豊かな自然の中で伸び伸びと育ったことが、「できない子の気持ちもわかる」「良い意味で教師らしくない」ことにつながったと語る北嶋先生。立命館大学で英文文学を学んだ後、袋井商高勤務を経て昭和45年に本校に着任した。主として2、3年の担任、野球部部長、ギター部顧問を勤め、俳優の別所哲也氏、声楽家の佐野文彦氏、劇団四季の正幸氏兄弟などの多彩な顔ぶれが先生のもとから巣立っていった。

英語教師を志したきっかけは、歴代高校時代に素晴らしい英語の先生に出会ったこと。医学部に進んだ長兄が買ってくれた英語の参考書、ラジオの英会話講座そして若くしてくつくなった高校の数学教師だった父の影響と言葉を続けるうちに、「モノ」を売ったりおカネを数える仕事ではなく、とにかく人間相手の仕事がかかったと力を入れた。

静岡時代を選んだ理由は、高校時代の国語の先生が、出張で訪れた静岡のことを「海と大地が広がる、まるで別天地だ」と滔々と語ったことが印象に残り、「海の見え方の所に住みたかった」とのこと。「藤枝東はいい思い出ばかりだ。生徒

は物事をきちんと向きまえており、とにかくバラエティに富み、個性派揃いだっただけで卒業してから様々な分野で活躍することになったかと思う」「こちらがたじろじとするような質問をすれば、先生は「わかんない、あてで調べて答えた。東高生ごまかしは一切通用しない」と思ったら、私も猛勉強した」「教師集団もアカデミックな雰囲気と同時に、みな平等という仲間意識が強かった。職員会議の司会も管理職ではなく、教員の輪番制だったね」

「野球部の部長時代、当時強豪だった島田工業を夏の大会で破った時は嬉しかったなあ」

本校で14年間勤務され、「次は小さな学校で頑張りたい」と金谷高校へ、その後焼津中央、島田高校を経て退職。その後、島田での非常勤講師。現場一筋で生徒とかわり続けた教員人生だ。

現在も毎朝、ラジオ講座を欠かさず、家庭教師や金谷大学でも熱い指導が続く。曰く「教えることが私の喜びだ」。

島田伊太任住、77歳。
 Mr. Kitahama I am still proud of being your student!
 (公認委員にして不肖の教え子・K)



航空自衛官としての人生
 航空幕僚長
杉山 良行
 (49回・昭和51年3月卒)

来歴について、東郷されるのが嫌いな自分にして大きな幸運でした。と言うのも自衛隊という堅いイメージがあると思いますが航空自衛隊は軽快で柔軟、明瞭な組織、皆さんには意外からも想像せんね。他の自衛隊に行ったらドロップアウトしていたかも知れません。

防大卒業後、戦闘機操縦者としての教育訓練を受けて初めて部隊に配属された当時は東西冷戦の真ただ中。対領空侵犯措置のための緊急発進、いわゆるスクラブルの赤い星を描いた機体は初めて見たときの興奮は今でも忘れられません。

時代は変わって今、スクラブルの主な相手は中国となっていますが、それが象徴する以上に、この40年ほどの間における安全保障環境の変化は大きく、現在の日本の安全保障は冷戦の時代を含めても戦後最大の脅威や懸念すべき事態にさらされていると言っています。

覇権を求め海洋に進出、力をもって現状変更を試みる中国、ミサイルや核兵器で緊張を煽る北朝鮮、連年の時代に立ち返ったようなロシア、こうした日々々に隣接し厳しい状況にある国は世界を見渡しても類を見ません。

このような環境の下、航空幕僚部として航空自衛隊4万7千人を率い、国民の安心、安全のため油断無く備えを毎日行っている。決して楽ではありません。しかしながらそんな厳しい環境で仕事ができることは武人としての大きな誉れです。そう自分に言い聞かせながら引退を目前に最後の日々を過ごしています。